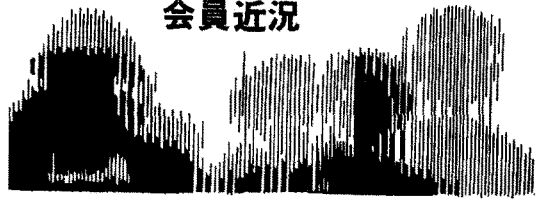


会員近況



東京女子大学名誉教授
千葉商科大学教授 小河原正巳

時系列予測の問題は古くて新しい問題で、私にとっても過去現在未来にわたる課題です。可能性に幅をもたせた区間予測や確率的予測を天気予報に導入することを提案したのは30年も前のことで、アメリカでは実施している気象サービス会社もあるが、残念ながら日本ではまだである。気候平年値も指数平滑のほうがよいが、これをWMOでとりあげるまでにはいろいろな問題がある。

統計的予測理論は、ランダムサンプルを基本としたものについてはすぐれた研究がなされているが、確率法則のパラメータが未知の場合の確率過程の精密標本論的な予測理論として、私自身の理論もまだ検討すべき点があるし、S. L. Lauritzen の点予測の試み (univ. aarhus, memoirs no. 1, 1974) などにも、基礎応用の両面に多くの問題が残されている。最近の現実的な時系列解析の survey としては S. Makridakis が *Intern. Stat. Rev.*, vol. 44, No. 1 (1974), vol. 48, No. 3 (1978) に書いたものがあつた。

国際商科大学商学部 門山 允

本誌3月号の「食糧問題」の座談会は大変興味深く読ませていただきました。しかし小生は最近各方面で話題になる食糧問題というのは well-defined ではないと考えています。それは、

- 1) ローマクラブの「成長の限界」のような宇宙船地球号の問題として人類全体のサバイバルの問題を考えているのか、
- 2) 日本だけのサバイバルの問題なのか、
- 3) 経済政策として日本の農業・水産業をどうしたらよいかという問題なのか、

どこに焦点があるのかわからないまま議論されていると思うからです。

たとえばオレンジの輸入問題などはサバイバルとい

う立場からは問題にならないことだと思います。今回の座談会でもその点少し焦点がボケている気がします。

富士通ファナック 原 亨
EDP部

1967年頃から、生産管理のEDP化にとり組んでおりましたが、最近になって Orlicky, Wight の言っているMRP (Material Requirements Planning) と同じことをやってきていたのに気づきました。MRPがこんなに有名になるのだったら当時論文にまとめておけばよかったと悔んでいます。その後、システムをオンライン・データベース(CODASYL型)に組みかえ、1977年10月

から実動に入りました。現在、当社は800名で月産約35億円をあげておりますが、われわれの作ったシステムも生産管理の面で効率化の一端をになっているものと自負しています。

Net Change も1978年1月から始めましたが、設計変更による Net Change はまだ実施しておりません。何か良いチエがありましたらお貸しください。今後とも仕掛資産と管理人員を圧縮してさらに効率を上げるよう珠玉のシステムを作り上げてゆきたいと思っています。

個人的には最近生態学に興味をもち、水問題、環境問題にひかれています。勉強することばかり多く、時間の不足を嘆いています。

奥平耕造君の逝去を悼む

森 川 繁 一

東京大学工学部都市工学科助教授、工学博士奥平耕造君は、1979年6月7日15時10分、42歳の若さで肝硬変のため急逝した。

都市工学の理論はオペレーションズ・リサーチに求めべきだと信じた同君は、早くから本会の会員となり、とくに1971～73年には広報委員、会員増強委員として、また1977～78年には編集委員ならびに地域研究部会主査として会の発展のため、熱心に活躍した。1977年以降の『オペレーションズ・リサーチ』誌の表紙のデザインも同君の発案によるものと聞く。

研究の面では、毎年のように建設省や国土庁の方面の委託研究を引き受けてきては、私や伊理正夫君などを仲間へ誘ってこれをおもしろく展開した。その成果は、大学での講義ノートをもとに、教科書としてまとめた『都市工学読本——都市を解析する』(彰国社、1976)に多く取り入れられている。その序文で同君は「専門以外の方向との共同研究がいかにも有効である場合があるかを身をもって知ることができた」と言っているが、こちらもしっかり同じ思いである。同君は、本物のデータをしかるべきところから見つけてきて提供し、問題の本質を見抜き、一見奇抜とも思われるような発想を交えて、われわれに格好の課題を示唆するのが常であった。またデータを美しく正確な図に表現する技術は抜群であった。それは子供の頃から各種の模型の製作に熱中した経験がもたらした能力であろう。そしてそれは1962年発行の『模型/



建築』と、その新版にあたる『建築の模型』(彰国社、1977)にもよく反映している。通夜の席の床の間に内田祥哉教授の達筆の説明文を添えて飾ってあった精巧きままる建築の模型は入院の直前に仕上げたものだという。

4月頃から不調を覚え、医師にも相談していたようであるが、それでも講義を休まず、会合等にも努めて出席し、最期の病床にあってもなお書物の校正のことを心配していたという責任感にはまったく頭が下がる。厳しい批判の眼の背後に、ほのぼのとした暖かい人間性を秘め、明朗快活な話術で人をとらえて離さない人柄は、多くの人に忘れられない印象を残していると思う。

いま、にわかには同君を失ったことは、かえすがえすも残念である。ご本人もさぞかし残念であろう。あとに残された恭子未亡人と、2人のお嬢さん、そして、同君の8歳の時にお父さんが亡くなってから、女手一つで彼とその姉さんを苦勞して育ててこられた年老いたお母さんのことを思うと胸がいたむ。これらの方々が、この悲しみに耐えて強く生きられるように、心から念願する。

これからは、あとに残ったわれわれが、同君の遺志を継ぎ、その企てつつも、しのこした仕事を、われわれなりに発展させ、仕上げてゆくことが、同君への最上の供養であるといえよう。

謹んで同君の冥福を祈って筆をおく。